

第1章 世界経済をデータでみる

伊藤万里・田中鮎夢『現実からまなぶ国際経済学』（有斐閣、2023年）

作成：田中鮎夢

2025-10-14

問題1. 重力方程式

国際貿易における重力方程式（グラビティ・モデル）が示す、2国間の貿易額を決定づける2つの基本的な要因は何か？

- A. 両国の人口規模と技術水準
- B. 両国の経済規模（GDP）と物理的な距離
- C. 両国の政治体制と為替レート

問題2. 付加価値貿易統計

グローバル・サプライチェーンの拡大に伴い、従来の貿易統計が抱える問題を解決するために開発された「付加価値貿易統計（TiVA）」は、主にどのような問題を是正するために用いられるか？

- A. 企業内貿易の割合を特定するため。
- B. デジタル貿易のように統計で捉えにくい取引を可視化するため。
- C. 中間財が国境を越えるたびに輸出額が二重計上される問題。
- D. サービス貿易の規模を正確に測定するため。

問題3. サービス貿易の分類

日本の消費者が海外旅行中に、現地のレストランで食事をした場合、WTOが定めるサービス貿易の4分類のうち、どれに該当するか？

- A. 拠点設置
- B. 国外消費
- C. 自然人の移動
- D. 越境取引

問題4. 地域貿易協定（RTA）

本文によると、1990年代以降に地域貿易協定（RTA, regional trade agreement）が急増した背景には、どのような事情があったとされているか？

- A. 冷戦が終結し、世界的な政治対立が緩和されたこと。
- B. 輸送コストが劇的に低下したこと。
- C. 発展途上国が経済成長を遂げたこと。
- D. 多国間での貿易交渉が難航したこと。

問題 5. 付加価値率の傾向

本文で示された図 1-8 「輸出額の国内形成付加価値率」から読み取れる、近年の日本と中国の傾向として正しいものはどれか？

- A. 日本の付加価値率は一貫して上昇し続けている。
- B. ドイツの付加価値率は、日本やアメリカと比較して常に高い水準を維持している。
- C. アメリカの付加価値率は、主要 4 カ国の中で最も低い水準にある。
- D. 中国の付加価値率は、ハイテク財の開発などにより上昇し、日本と同水準に近づいている。

問題 6. 多国籍企業の海外進出

企業が本拠地以外の国でも事業活動を行う「多国籍企業 (MNE)」の海外進出を統計的に捉える際に、最もよく用いられる指標は何か？

- A. 地域貿易協定 (RTA) の締結数
- B. 外国直接投資 (FDI)
- C. 付加価値貿易統計 (TiVA)
- D. 産业内貿易指数

問題 7. デジタル貿易

本文で述べられている「デジタル貿易」の概念に最もよく当てはまる事例はどれか？

- A. 海外の取引先とオンライン会議システムを使って商談を行うこと。
- B. 外国人観光客が日本を訪れ、店舗で電子マネーを使って決済すること。
- C. 海外の動画配信サービスと契約し、インターネット経由で映画を視聴すること。
- D. 外国のオンラインストアで注文した商品が、物理的に配送されてくること。

問題 8. 移民

世界の移民・外国人労働者の動向について、本文で述べられている内容と合致するのはどれか？

- A. 世界の移民受け入れ数は 1990 年以降、減少傾向にある。
- B. 2019 年時点で、世界の移民の受け入れはアメリカが最も多く、全体の約 2 割を占めている。
- C. 日本では定住を目的とした移民を積極的に受け入れており、その数はアメリカに次いで世界 2 位である。

問題 9. 取引コストの低下

技術革新による取引コストの低下は、第 2 のグローバル化における貿易拡大の大きな要因とされている。本文の図 1-5 で示されているコストのうち、1930 年と比較して最も低下率が大きかったものはどれか？

- A. 国際通話費
- B. 海上輸送費
- C. 旅客航空輸送費
- D. 陸上輸送費

問題 10. 重力方程式の応用

重力方程式（グラビティ・モデル）によると、2 国間の貿易額は、両国の経済規模（GDP）の積に比例し、両国間の物理的な距離に反比例するとされる。ある 2 国間について、A 国と B 国の GDP がそれぞれ 2 倍になり、同時に両国間の距離が半減した場合、貿易額は初期状態の何倍になるか？

- A. 2 倍
- B. 4 倍
- C. 6 倍
- D. 8 倍

解答

1. B
2. C
3. B
4. D
5. D
6. B
7. C
8. B
9. A
10. D

問題 10 の解説

国際経済学においては、2 国間貿易を定量的に説明するために、ヤン・ティンバーゲンによって万有引力の法則が応用された**重力方程式 (Gravity equation)** が用いられる。

重力方程式の一般的な形式は次の通りである。

$$2 \text{ 国間の貿易額} = \text{定数} \times \frac{\text{輸出国の GDP} \times \text{輸入国の GDP}}{2 \text{ 国間の距離}} \quad (1)$$

この式から、2 国間の貿易額は**両国の経済規模 (GDP)** の積に比例し、**2 国間の物理的な距離** に反比例することがわかる。

問題 10 では、以下の変化を考慮する。

1. **GDP がそれぞれ 2 倍** (積は $2 \times 2 = 4$ 倍となる)。
2. **距離が半分** (分母が $1/2$ となる)。

変化後の貿易額は、元の貿易額の

$$\text{定数} \times \frac{(2 \times \text{GDP}_A) \times (2 \times \text{GDP}_B)}{(\frac{1}{2} \times \text{距離})} \times \frac{4}{\frac{1}{2}} \times \text{定数} \times \frac{\text{GDP}_A \times \text{GDP}_B}{\text{距離}} = 8 \times \text{定数} \times \frac{\text{GDP}_A \times \text{GDP}_B}{\text{距離}}$$

となる。したがって、貿易額は初期状態の **8 倍** となる。